

「道しるべ」

「Aちゃんのお父さん、海外から帰ってきたらいいよ。」
新型コロナウイルスの感染者が増加している最中、妻が近所の知り合いから聞いてきました。

「Aちゃんの家って公園の前だったっけ。去年うちの子と同じクラスじゃなかったかな。」そうそう。家が近いからよく一緒に帰ってきてるよ。」

こんなやりとりをしながら、私は瞬間的に「うちの娘と一緒に遊んでいいのではないか」「家に遊びに行っていたらどうしよう」という不安を感じていました。

しかし翌日、その噂は事実とは異なっていることがわかりました。Aちゃんのお父さんは、仕事の関係でよく海外には行っていたものの今年は一度も訪れておらず、国内の単身赴任先から帰ってきたのだということでした。

私は、感染拡大の中で不確かな情報やデマが飛び交い、誰かを排除したり攻撃したりする差別や偏見が生まれているというニュースを聞く度に心を痛めていましたが、今回もし、私が娘に「Aちゃんの家には近づかないように」というような話をしてしまっていたら、自分もそれを生み出す一人になるところでした。そして、私自身も県外へ毎日通勤しているのも、もしかしたら家族も含めて、誰かから同じような目で見られているのではないかと思うと、決して他人事とは思えなくなりました。

ほどなくして臨時休校が明け、学校が再開しました。子どもたちに「久しぶりの学校はどうだった」と聞いてみると、娘は「席も離れてるし、友だちともあまりしゃべれなくてつまらなかった。でも、Aちゃんと帰り道にした『エアータンガ』がおもしろかったよ。」と話してくれました。二人で腕を振るタイミングを合わせて、実際に手をつないでいるようにするのだそうです。「Aちゃんが急に早歩きしたり、スキップしたりするんやもん。」と楽しそうに話を続けました。



高校生の息子は、部活動が制限され集まって練習できない分は、無料通信アプリのビデオ通話を使って、チームメイトと一緒に毎日筋トレをしているようです。画面を見ながらお互いに励まし合うと、練習時間は短いけれど、今までより集中してできるようになり、まとまりもできてきたと言っていました。

何かと制限の多い生活の中で、体の距離は離れても、子どもたちなりに前向きに楽しく過ごす工夫をしながら、友だちとの心のつながりを大切に生活していることがわかり、安心することができました。

こうした子どもたちの姿から私は、ウイルスへの不安や恐怖心ばかりが先行し、「人とのつながり」という大切なものを見失いかけていた自分に気づかされました。Aちゃんのお父さんの件でも、人を尊重する心を忘れ、相手の気持ちを想像することもせず一方的につながりやを切ろうとしていたことが問題なのだということが、今ならわかります。

こういう時だからこそ、私たち大人が相手を思いやり、つながり合って困難を乗り越えていく姿を示していくことが大切なのではないかと感じます。それはきっと、将来子どもたちが挫折や困難を乗り越えていくときの「道しるべ」になるのだろう、今はそんなふうに思っています。